

達成感や自己有用感を高める体験活動の工夫  
～川西市の里山体験事業～

川西市立東谷小学校  
教諭 野間 俊介

1 取組の内容・方法

(1) はじめに

本校は川西市の北部に位置し、開校は明治6年と、川西市内でも最も歴史のある学校である。それゆえ地域と密接に連携し、地域に支えられ発展してきた。校区のおよそ5分の4がベッドタウンであるが、ところどころに農村風景がみられる。新名神高速道路・川西インターチェンジの開通や川西市中央部の再開発などにもない、校区の環境の変化が見られる。しかしながら、地域の伝統的な文化が色濃く残っている校区でもある。このような本校の校区に「日本一の里山」と呼ばれる黒川地区がある。

黒川地区は、川西市の最北部に位置し、深い歴史がある。その黒川地区が「日本一の里山」と呼ばれるには、いくつかの理由がある。古くはこの周辺の一庫・国崎等の北摂地区全体で炭焼きが行われていた。その歴史が黒川地区でも現在でも続き、茶道で使用される道具炭として最高級品である池田炭（一庫炭）が生産されている。この池田炭は、かつて豊臣秀吉や千利休も愛用したと言われている。

このような歴史的・文化的な特徴をもつ黒川地区だが、その池田炭（一庫炭）の生産のためには、材料としてクヌギが必要である。そこで黒川ではクヌギの枝を得るために、クヌギの幹を1～2メートルのところまで伐採し続けてきた。結果、幹が太くなり、新たな枝が形成され、台場と呼ばれる形状となった（台場クヌギ）。



台場クヌギを観察する児童たち

このことで効率よくクヌギの枝を得るとともに、シカによる新芽の食害を防ぐことができる。また、台から出た芽は生育が早く、台の高さの分、他の草木に比べ日照を得やすく生育しやすい。このような昔からの知恵が、今もなお引き継がれており、台場クヌギを中心とした、黒川ならではの景観が形作られている。この景観という面においても、黒川地区では、年をずらしながら、約8年周期で台場クヌギの枝を伐採（輪伐）していることから、伐採年度の異なる樹林がパッチワーク状になっている。このよ

うな黒川ならではのパッチワーク状景観に加え、春にはエドヒガン（桜の一種）が開花することで四季折々の美しさを感じることができる。この黒川の台場クヌギの群落は川西市教育委員会より、市指定文化財（天然記念物）に指定されている。また、台場クヌギには、オオクワガタやカブトムシ、オオムラサキなど様々な昆虫類が集まり、周辺の小川には多くの水生生物が生息し、周辺の池にも多くの種類のトンボが集まることから、多様な生物を観察することができる。

これらのことから、黒川地区が「日本一の里山」と言われている。川西市ではこのよう

な黒川地区の素晴らしさを活かし、黒川地区をフィールドに体験学習活動が行われている。

### (2) 川西市における里山体験学習事業について

兵庫県下全小学校において、小学校3年生では環境体験学習、5年生では自然学校と兵庫型体験教育が推進されている。川西市ではこれらに加えて市内全小学校4年生において、「里山体験学習事業」が独自に行われている。ここに1・2年生での生活科における栽培体験やプール等での水生生物観察、6年生での総合的な学習の時間や社会科・理科での学習などを加えることで、小学校6年間の「人・暮らし・自然とのふれあいを通した連続的な体験学習」の取り組みとなっている。

里山体験学習事業は、先に述べた「日本一の里山」といわれる川西市北部の黒川地区を舞台に行われる体験学習である。黒川地区での体験活動や地域住民との交流を通して、自然に対する敬意の念や生命のつながり、環境保護の大切さ等を実感するとともに川西の持つ豊かさ(ひと・暮らし・歴史・自然等)にふれあうことを目的としている。黒川地区での体験活動の例として、里山でのフィールドワークや植物・水生生物の観察、下草刈り等が挙げられる。また、地域住民とのふれあいとして、里山の暮らしに関する講話や炭焼き窯の見学、しめ縄づくりの見学などが挙げられ、これらを組み合わせて、市内各校においてそれぞれ工夫した取り組みが行われている。

### (3) 本校の取り組みについて

#### 事前学習

黒川地区の散策にあたって、事前学習として、里山とは何かについて学習した。里山とは人里近くにある生活と密接した空間である。つまり人間が自然と共生しながら活用している森林のことである。たとえばクヌギやアカマツ、カシ、コナラ等の木で薪や炭が作られ、堆肥や草木灰を作るために落ち葉も集められた。ほかにも建材や食料を手に入れてきた。このように、里山は人家のまわりであって、生活になくってはならないものであった。このような里山が今もなお黒川地区で引き継がれているという歴史性・炭焼きを通して見える文化性などを、子どもたちは知った。このような素晴らしい環境が自分たちの校区に身近に存在していることに驚いていた。

また、フィールドワークの際に、より自然に注目しながら興味をもって活動することをねらいに、「自分たちが見つけてみたい動植物」を決めることにした。そのために、『かわにし 里山の自然と生きもの』(川西市教育委員会編)を活用した。この冊子では、黒川の様子や、そこに生息する多様な動植物、さらに地質などが写真付きで詳しく紹介されている。実際に黒川地区で見られるものの中から、自分が見つけたいものを考えるため、インターネットや図鑑から考えるより具体的になり、見つけられる可能性が高まった。また、調べやすいため、学校に戻ってきた子どもたちは「あのトンボの名前は？」と自分たちで調べていた。



フィールドワークの様子

## 6月の様子

黒川地区へは6月と11月、2回訪れた。6月は里山を感じることに、自分たちの校区を知ることめあてに、能勢電鉄妙見口駅から黒川公民館までの約3キロメートルの道のりを徒歩で移動した。時間がかかるものの、黒川地区の様子を肌で感じることは大きい。移動の際、事前学習で知ったパッチワーク状景観を確かめたり、野草の名前を確認したりしながら、里山のくらしや自然にふれることができた。

現地に着くと、黒川地区の地域ボランティアである、里山体験学習サポーターの方々より黒川の自然と人々との共生の歴史や自然、特色、くらしに関する話を伺った。黒川における四季の変化や、棚田における稲作、小学校時代のお話など、子どもたちは興味深く聞いていた。その後、クラスごとに里山体験学習サポーターの方と一緒に里山散策を行った。散策を通して、棚田や里山に豊富にある森林資源を活用した菊炭づくりやシイタケの栽培、その結果台状に生長した台場クヌギ、活動を通して見つけた野生生物や里山の植物などについて話をしていただいた。話をしていただくことで、子どもたちは自然の豊かさや里山のくらしを知ることができた。

また、「みんなに紹介したいものを撮影しよう」として、班に1台のデジタルカメラを用意し、事後のまとめ学習の資料を撮影した。撮影することで、自然物を持って帰ることがなく、すすんで自分たちで取り組み、また容易に活動を振り返ることが期待できる。

特に子どもたちは台場クヌギや落ちていたトビの羽、ササユリ、サワガニ等に興味をもって観察したり、撮影したりしていた。

午後からは炭焼き窯見学をした。菊炭の作り方や、作り方の工夫、窯の構造などについて詳しく教えていただいた。このような窯が校区にあること、炭作りの工夫などを知り、子どもたちは「今度、家族で来て、菊炭を分けてもらいたい」「東谷に、こんな歴史があったとは知らなかった」と喜んでいった。

フィールドワーク後は、取材してきた内容をもとに、伝えたい内容に合致する写真を選び、レイアウトを工夫しながら壁新聞を作成した。



紹介したいものを撮影する様子

## 11月の様子

11月の活動は、社会科「ごみのゆくえ」とも関連して取り組んだ。自然環境の大切さを6月に感じ取っていた子どもたちは、ごみの処理や環境への影響などの学習に対して、真剣になって取り組んでいた。そこで、クリーンセンターの見学を行うことで、北摂のごみの処理や、環境負荷に対する取り組みについて実地に学んだ後、あらためて黒川の里山に触れることにした。クリーンセンターでの子どもたちは、係員の説明を一生懸命に聞き取り、メモする姿が見られた。

黒川地区では、初夏の里山の様子と、秋の里山の様子を比較することを目的に、場所を変えずにフィールドワークを行った。子どもたちは「なつかしいな」「ここがお気に入りの場所やねん」「前はここにカエルがいたね」「あ、ここにキノコが生えてる！」と言いつつ

ら、愛着を持って散策していた。また里山体験学習サポーターの方々より、黒川での米の栽培や原木シイタケの栽培、実りの秋を迎えて里にまで下りてくる野生動物の動きなど、秋の様子について具体的な話を伺うことができた。

このフィールドワークを通して、子どもたちは初夏のころ、青々としていた山々が色づいてきたこと、見られる動植物が変わっていること等をとらえることができた。また、このような素晴らしい自然環境を保全していくためにごみの処理について深く考えていく必要があることを感じ取ることができた。

また、そのあと行われた作品展にも里山での学びを関連させることにした。それがダリアの花である。川西市は、山形県川西町とのダリアを通じた交流が行われていることから、黒川地区で「黒川ダリヤ園」を中心にダリアが栽培されている。このことから、「黒川地区の花」ともいえるダリアを作品展で再現することにした。子どもたちも、「黒川の花や!」と言いながら作っていた。



スイレン咲のダリアの作品

## 2. 取組の成果

- (1) 春と秋の里山を比較しながら散策することで、季節による自然の変化を感じ取ることができた。同じ場所を訪れることで、季節による里山の変化をより一層とらえることができた。「春にはサワガニがたくさんいた」「秋にはトンボが多くいた」「紅葉が始まってきてきれいだったので、秋の里山が好き」「どんぐりをたくさん拾えたのがうれしかった」等の感想が見られた。
- (2) 里山の歴史や暮らし、炭焼きの話を学んだことを通して、自分たちの校区には素晴らしい自然環境や深い歴史があることを知ることができたことは有意義であった。自分たちのふるさとである北摂東谷に愛着を持ち、川西市に対して興味を深めたように感じられる。
- (3) 黒川地区の豊かな自然環境を体験したことで、子どもたちの環境保全に対する意識が高まった。北摂地域におけるごみの処理、環境保全や資源（再利用等）の環境負荷を考えた取り組みに対する学習では意欲をもって取り組んでいた。

## 3. 課題及び今後の取組の方向

今後は子どもたちが今ある豊かな自然環境を、10年後20年後も守り、この地域を誇りに思えるよう指導していきたい。そのためには、家庭や地域との連携が不可欠である。本校の家庭や地域は学校にたいへん協力的で、本取組では地域ボランティアの協力を得ることができ、子どもたちは地域に愛着を持ちながら主体的に学びに向かっていった。このような「地域に学ぶ」「地域で学ぶ」という姿勢を大切にしていきたい。

また環境体験事業や自然学校推進事業等のつながりを意識した、キャリア教育の視点からの里山体験活動の推進が必須である。このような学年をこえた縦につながった学びのほか、各教科での横断的につながった学びを意識した取組を推進していく必要があるだろう。